

編纂の進捗状況

中 川 和 明

はじめに

『早稲田大学百五十年史』の編纂状況の報告は、二〇一一年度からはじまり、今回で第三回目である。前回に引き続き、本稿では二〇一二年一月から二〇一三年一〇月末までの編纂状況について説明していきたい。

一 二〇一二年度の編纂委員会と大学本部との懇談

(一) 二〇一二年度百五十年史編纂専門委員会(第一回)

二〇一二年一月一四日(二時～一三時四〇分)に、二〇一二年度早稲田大学編纂専門委員会(第一回)が大学史

資料センター会議室で開かれた。出席者は、浅古弘、沖清豪、真辺将之、大日方純夫（百五十年史編纂専門委員会委員長）の四名で、協議事項は次の通りである。

1. 『百五十年史』の構想・構成の件

（1）第一巻について

担当者から第一巻の課題と構想案について、百年史との対応関係などを中心に説明があり、了承された。また、各委員から次のような意見が出された。

・第一巻については、百年史にあった大隈重信や小野梓の伝記的記述を省き、東京専門学校の成立から書き始める。

・百年史のダイジェストを中心とするが、研究の進展による修正を行い、新資料の発見の成果も盛り込むようにする。

・百年史にあった学生生活や校友の活動について大幅に省くことにする。

・百年史の随所にある史料の長文の引用や学科配当表の掲載などは行わない。

・統計や資料などを『記要』やWeb版に掲載することを計画している。

・他大学との関係にも注意が必要である。例えば、京都帝国大学設置（一八九七年）によって法学部の講師が多数引き抜かれ講師不足に陥るという事態があったが、百年史には書かれていない。

（2）第二巻について

担当者から第二巻の課題と構想案について、百年史との対応関係などを中心に説明があり、了承された。また、各委員から次のような意見が出された。

・第一巻末で戦災・復興について触れ、第二巻のはじめで新制早稲田大学の発足をめぐる模索について本格的に記述する。

・百年史では六〇年代半ば以降について、関係者が存命中などのため踏み込んだ記述を避けた箇所がある。百五十年史では評価を含むこうした箇所について編纂委員会で協議する。

・百五十年史から省くことにより、百年史を参照しなければならない事態が生じるが、これにどう対処するのか、という問題が生じる。

(3) 第三巻について

委員長より、第三巻の課題と構想案について説明があり、了承された。また、各委員から以下のような意見が出された。

・時期区分の基準は、①総長の代、②周年の基本計画、③文科省の方針など学外状況の三通りが考えられるが、これらは相互に密接に関係しているため、検討が必要である。

・第三巻のはじめ方について、一九九〇年代の大学設置基準の大綱化以降とする構想案が出されている。しかし、一九八〇年代中頃の臨時教育審議会による改革提案が一九九〇年代初めに大綱化につながった。また、将来計画審議会（第一次、一九八七～一九九〇年）は第二巻末か第三巻のはじめかという問題もある。つまり、第二巻で八〇年代前半までを扱い、第三巻は八〇年代後半からという案もありうる。

・第二巻末と第三巻はじめに重複する過渡期を設けることも一案である。

・第三巻の刊行予定が二〇三二年なので、内容の下限は二〇二五年頃（第三巻執筆開始の時期）が妥当である。

・大学の負の側面を如何に扱うのかという難問がある。

・少子化時代における大学財政について、学生数の推移、資産運用、外部資金獲得、収益事業、年金問題など多面的に記す必要がある。

2. 資料調査・収集の件

委員長から、資料別、対象別に今後の資料調査・収集のあり方について説明があり、了承された。また、各委員から次のような意見が出された。

・Next25や周年計画関係などの資料の保管先を把握している。
・広報課が、学外からの問い合わせに対する内部での調査結果をかなりファイルしているが、すべてを把握しているわけではない。

・大学史資料センター一時保管のもの以外の本部資料についても、目録化が必要である。

・小山総長資料は未整理のまま寄贈を受け、大学史資料センターで整理中である。

・他の総長経験者の資料調査・収集については、今後の課題である。

3. 聞き取り調査の件

委員長から、大学史資料センターの行ったヒアリング調査の現状について説明があり、了承された。また、各委員から次のような意見が出された。

・大学史編集所時代に行ったヒアリング調査の古いテープについては媒体変換が必要である。

・大学史資料センターの行ったヒアリング調査については、既に業者による荒おこしがかなりあるが、原稿校正などの作業がまだ残されている。

・理事のうち聞き取り調査予定者については既にリストアップしてある。教務部長などまで聞き取り調査の範囲

を広げる必要がある。

また、報告事項は次の通りである。

1. 早稲田人名データベースの件

担当者から、五〇人を選定してデータベースを作成中であり、公開には演劇博物館のサーバーを利用することが了承済みであるが、現在、公開に向けた実務的な作業を進めている旨の説明があった。また、遅くとも今年度中に公開し、正式名称を「早稲田人名データベース」とすることで、広く早稲田大学関係者を掲載していく予定である旨の説明も加えられた。

2. 理事会・評議員会・維持委員会資料の目録化の件

担当者から、大学史資料センターで一時的に保管している本部資料の目録化の進捗状況について説明があった。また、各委員から次のような意見が出された。理事会関係資料の褒章に関する記録は、すべてを網羅しているわけではないこと、このデータベースは内部での作業用のものであり、外部に公開するものではない。

3. 写真データベースの件

担当者から写真データベースの戦後編について可能なものから作成している旨の説明があった。また、委員から次のような意見が出された。①著名人の肖像権を財団などが管理している場合があるので調査が必要である。

②外国人の肖像権についても分かる範囲で調査する。③同一の写真を除外して、データを絞る必要がある。

4. 作業用年表作成の件

担当者から、第三卷関係作業用年表（一九九〇年以降）について、小山総長時代までは比較的出来ているが、白井総長時代以降は簡略なものに過ぎず、今後追加していく旨の説明があった。

(二) 二〇一二年度百五十年史編纂委員会(第一回)

二〇一二年二月一日(十一時三〇分～一二時三〇分)に、編纂委員会が九号館五階第一会議室において開催された。出席者は、藁谷友紀(百五十年史編纂委員会委員長、守田芳秋、大日方純夫(百五十年史編纂専門委員会委員長、川口浩、真辺将之、湯川次義、横山将義、島善高、志々田文明、吉岡英幸、浅古弘、沖清豪の一二名であった。協議事項は次の通りである。

1. 『百五十年史』の構想・構成に関する件

大日方委員から以下のような説明があった。

(1) 第一巻と第二巻Iについて

・『百年史』と重複する時期であるため、『百年史』が詳しく記述している大隈・小野の個人史、一般史的記述、学生のサークル活動や運動部、校友会、卒業生などの記述は大幅に割愛し、本筋の大学の展開を中心に叙述する。

(2) 第二巻Ⅱ・Ⅲについて

・第二巻Ⅱ・Ⅲは『百年史』をベースに叙述するが、『百年史』では記述が少ない時期であるため、新たに加える事項について、今後、協議していく必要がある。

・七〇年安保問題、所沢・幕張校地問題など、扱いの困難な事項の書き方・評価については、基本方針を編纂委員会で協議・確認していく必要がある。

(3) 第三巻について

・第二巻と第三巻の区切りについて、構成案では第三巻の開始を大学設置基準大綱化以後の一九九〇年代として

いるが、大学内では八〇年代からすでに改革の動きがあり、後者を重視した時期区分も考えられる。

・第三巻は『百年史』に全くない部分であるため、現在、作業年表を作成しながら記述すべき項目を選定中である。「早稲田祭」問題など評価を含む事項を如何に扱うか、盛り込む事柄の取捨選択をどうするのか、今後、編纂委員会で協議する必要がある。

・第三巻の下限は、執筆・編集がはじまる二〇二五、二六年度頃までを想定しているが、今後、編纂委員会で協議していく必要がある。

これらをうけて各委員から、次のような意見が出された。

・第一巻と第二巻Ⅰについても、学生等に関する事柄を全て省略するのは妥当ではない。

・『百年史』では、一九四五年から新制大学発足までの戦後復興期に関する記述が少ないので、『百五十年史』では第一巻末と第二巻はじめの両方で扱う必要がある。

・第二巻の構成案に、Ⅰ新制大学としてのスタート、Ⅱ高度成長と大学、Ⅲ大学の大衆化と早稲田大学、とあるが、大学の大衆化は高度成長期に始まっているとみられるので、章のタイトルを変更した方がよい。

・年史はある時期まで詳しく、後半になると事実の羅列になることが多いので、『百五十年史』ではこれを如何に回避するかについて智慧を絞る必要がある。

2. 資料調査・収集に関する件

大日方委員から、以下のような説明があった。

(1) 本部資料について

・総務部・教務部に年明けに懇談の機会を持つことを要請し、本部資料の状況や利用の方途について話し合う予

定である。

(2) 学部・大学院改革関係について

・学部・大学院の資料は莫大であり、何を残すべきかという問題がある。学部・大学院の新設・改変は本部資料では最終的な結論しか残らないため、そのプロセスが分かる資料を保存・収集していく必要がある。

・退職の際、教員が大学史資料センターに資料を寄贈するケースがあるが、系統的な収集が必要である。これらを受けて各委員から、次のような意見が出された。

・各箇所における資料保管のあり方と大学史資料センターへの移管について、原則の確認が必要である。本部部長と各学術院事務長との連携会議の際、大学史資料センターからの依頼として資料保存・移管の問題に触れ、全学的に意見を取りまとめていくことも考えられる。

・基礎的な資料を収集することと、センシティブな問題を記述・公開することとは別の事柄であり、両者は分けて考える必要がある。

・「Waseda Vision 150」に文書館設置についての記載はないが、『百五十年史』を作成することだけを目的とせず、編纂の過程で大学アーカイブズの機能を高めていく必要がある。

また、報告事項は、百五十年史編纂委員に関する件、百五十年史編纂専門委員会の報告に関する件、早稲田人名データベースに関する件、写真資料の収蔵及び整理公開に関する件、理事会・評議員会・維持員会資料の目録化に関する件の五件であった。

なお、先に二〇一二年度百五十年史編纂委員会（第一回）で決まった本部所管資料の調査を実施することになった。二〇一三年三月に総務部に赴いて初めてのヒアリング調査を行い、文書保存について話を伺った。次いで三月七日に

キャンパス企画部、四月一日に教務部教務課と懇談を行った（教務部は組織が大きいため課ごとに調査）。翌四月二日、広報部広報課と懇談した。このように四回にわたって、本部と懇談を行い、保存文書目録の提供依頼や大学史資料センターが今後保存状況を実見することなどが話し合われた。

二 二〇一三年度前期の活動

（一）二〇一三年度の百五十年史編纂専門委員会（第一回）

四月に入ると大学史資料センターでは東伏見キャンパスへの移転に向けた準備を開始した。四月二四日（一二時一〇分～一三時）に編纂専門委員会が開催された。出席者は浅古弘、沖清豪、真辺将之、大日方純夫（百五十年史編纂専門委員会委員長）の四名。協議事項は次の通りである。

1. 資料調査・収集の件

（1）学内文書の調査・収集

委員長より、第一次本部所管資料（総務部・キャンパス企画部・教務部教務課・広報室広報課）の調査結果の説明があり、今後、保管状況の視察を実施するとともに、承諾を得た保存文書目録の提供を受ける旨の説明があった。第二次資料調査として教務部の他の課の所管資料や学院関係資料等を調査する旨が説明され、了承された。

また、各委員から、本部では大事な資料がなくなっている場合があるため、保存文書目録の内容を精査するとともに、目録に載せられている資料が実際にあるか否か実見して確認する必要があるとの意見が出された。

(2) 学外機関所蔵資料の調査・収集

① 東京都公文書館所蔵早稲田大学関係書類の再調査

委員長より、『早稲田大学史記要』六巻～一一巻に部分的に翻刻掲載された東京都公文書館所蔵早稲田大学関係書類を再調査して、後述する「早稲田大学関係資料DB（仮称）」の中に画像・翻刻データを追加し、百五十年史編纂に供する旨の説明があり、了承された。また、『早稲田大学史記要』六巻～一一巻に翻刻掲載されたものは東京都公文書館所蔵早稲田大学関係書類の一部分にすぎないため、その他の東京都公文書館所蔵早稲田大学関係書類については『早稲田大学史記要』に新たに翻刻掲載するなどして公開していく必要がある旨、東京都公文書館の担当者に確認したところ画像データを公開することに問題はないとの回答を得た旨の補足説明があった。

② 文科省所蔵早稲田大学関係書類

委員長より、東京都公文書館所蔵早稲田大学関係書類の再調査の後に文科省所蔵早稲田大学関係書類についても調査する必要がある旨、文科省所蔵資料や文科省から国立公文書館に移管された資料については、事前に所在や整理状況等を十分に確認したうえ調査する必要がある旨の説明があり、了承された。

2. 『早稲田大学百年史』編纂時収集資料の活用・公開の件

(1) 「早稲田大学本部書類」及び「早稲田大学本部書類（続）」のデータベース化

委員長より、「早稲田大学本部書類」及び「早稲田大学本部書類（続）」（一九七四年移管）のデータベース化の現状と公開について説明があり、了承された。なお、「早稲田大学本部書類」及び「早稲田大学本部書類（続）」の目録データについては公開することは可能であるが、履歴書等（履歴書の点数は把握している）の取り扱いには注意が必要であるため、画像データの公開には慎重を期す必要がある旨の補足説明があった。

(2) 『東京専門学校校則・学科配当資料』の目録化

委員長より、以前刊行された『東京専門学校校則・学科配当資料』（一九七八年刊）の目録化作業についての説明があった。また、この『東京専門学校校則・学科配当資料』には他機関所蔵資料の影印をそのまま使用している箇所があるため、公開に当たっては念のため当該機関に通知しておく必要がある旨の説明があり、了承された。

〔「東京専門学校・早稲田大学教務関係資料」の細目録化〕

委員長より、「東京専門学校・早稲田大学教務関係資料」（一九九九年移管）の細目録化を進めるとともに、公開方針について議論する旨の説明があり、了承された。

〔「早稲田大学関係資料DB（仮称）」〕

委員長より、「早稲田大学関係資料DB（仮称）」は基本的には内部作業用の非公開のものであるが、部分的に公開することも検討していく旨の説明があり、了承された。

3. 『早稲田大学百五十年史』編纂体制の件

委員長より、当面の委員会（編纂専門委員会・編纂委員会）の開催サイクルを前期・後期に分けることで活動の速度を上げる必要がある旨、恒常的に機能できる編集委員会を新たに設けるため人員（学内教員の参加や専属スタッフ）等を固めて大学に申請していく必要がある旨、百五十年史の記述を個人名の文章ではなく大学名のそれにするため十分に確認・修正することの出来る編纂体制にする必要がある旨の説明があり、了承された。

次に、報告事項は以下の通りである。

1. 本部所管資料調査の件

委員長より、第一次本部所管資料調査（総務部・キャンパス企画部・教務部教務課・広報室広報課）の実施状況につ

いて、別紙の通り説明があった。

2. データベースの件

委員長より、早稲田人名データベース、写真データベース（戦後編）、大学史資料センター一時保管の本部資料目録化の作業状況について説明があった。

（一）二〇一三年度の百五十年史編纂委員会（第一回）の開催

二〇一二年度まで編纂委員会開催は年一回が通例になっていたが、本年度からは編纂委員会を年二回とし、七月九日（二時～三時、於二六号館）に第一回を開催した。この編纂委員会によって、今後の編纂体制をどうするのかはじめて話し合われた。出席者は藁谷友紀（早稲田大学史編纂委員会委員長）、守田芳秋、大日方純夫（早稲田大学百五十年史編纂専門委員会委員長）、恩蔵直人、飯島昇蔵、川口浩、横山将義、島善高、志々田文明、鈴木義昭、沖清豪の一名である。協議事項は次の通りである。

1. 資料調査・収集に関する件

大日方委員から、別紙にもとづき以下の説明があり、承認された。

（1）学内文書の調査・収集について

・四回にわたる第一次本部所管資料（総務部・キャンパス企画部・教務部教務課・広報室広報課）の調査結果を踏まえ、今後、大学史資料センター側が直接立ち入って保管状況を確認するとともに、承諾を得た保存文書目録の提供を受ける。

・第二次資料調査として、教務部の他の課の所管資料や学院関係資料等を調査・収集する。

(2) 学外機関所蔵資料の調査・収集

① 東京都公文書館所蔵早稲田大学関係書類の再調査

・『早稲田大学史記要』六巻～一一巻に部分的に翻刻掲載された東京都公文書館所蔵早稲田大学関係書類を再調査して、後述する「早稲田大学関係資料DB（仮称）」の中に画像・翻刻データを追加し、百五十年史編纂に供する。

・『早稲田大学史記要』六巻～一一巻に翻刻掲載したものは東京都公文書館所蔵早稲田大学関係書類の一部分にすぎないため、その他の同館所蔵早稲田大学関係書類については『早稲田大学史記要』に新たに翻刻を掲載するなど資料化して公開していく必要がある。

・東京都公文書館の担当者に確認したところ、画像データを公開することに問題はないとの回答を得た。

② 文科省所蔵早稲田大学関係書類

・東京都公文書館所蔵早稲田大学関係書類の再調査の後に、文科省所蔵早稲田大学関係書類についても調査する必要がある。

・文科省所蔵資料や文科省から国立公文書館に移管された資料については、事前に所在や整理状況等を十分に確認したうえで調査する必要がある。

さらに、大日方委員より現在はまだ資料の所在・保管状況を広く調査している段階であり、これらを基に百五十年史編纂に必要なものを絞り込んでいくことになるといった補足説明もなされた。

2. 『早稲田大学百年史』編纂時収集資料の活用・公開に関する件

大日方委員から、別紙にもとづき以下のような説明があり、承認された。

(1) 「早稲田大学本部書類」及び「早稲田大学本部書類(統)」のデータベース化

目録データについては公開することは可能であるが、履歴書等(履歴書の点数は把握している)の取り扱いには注意が必要であるため、画像データの公開には慎重を期す必要がある。

(2) 『東京専門学校校則・学科配当資料』の目録化

一九七八年に刊行された資料集『東京専門学校校則・学科配当資料』の目録化作業を現在進めているが、他機関所蔵資料の影印をそのまま使用している箇所があるため、公開に当たっては念のため当該機関にその旨を通知しておく必要がある。

(3) 「東京専門学校・早稲田大学教務関係資料」の細目録化

今後、細目録化を進めるとともに、公開方針について議論する必要がある。

(4) 「早稲田大学関係資料DB(仮称)」

基本的には内部作業用の非公開のものであるが、百五十年史の資料編に代替するものとして、部分的に公開することも検討していく必要がある。

これを受けて各委員から資料の公開基準などに関する質問が出され、大日方委員から基準を作成する必要があるが、大学史資料センター所蔵資料の公開基準よりも厳しくする旨の回答があった。

3. 『早稲田大学百五十年史』編纂体制に関する件

大日方委員から、別紙にもとづき以下のような説明があり、承認された。

(1) 当面の委員会開催サイクル

これまで編纂委員会は年1回開催であったが、今年度から編纂専門委員会・編纂委員会の開催サイクルを前

期・後期に分けることで、活動の速度を上げる必要がある。

(2) 執筆・編集体制の構想

・編纂専門委員会には規程がなく権限も与えられていないため、百五十年史の原稿を執筆・検討できるような仕組みになっていない。実際に責任をもって執筆にあたる編集委員会を新たに設けて、人員（学内教員の参加、専属スタッフ、事務スタッフ）を配置し、編纂委員会に提案できるような執筆・編集体制にする必要がある。

・二〇一四年度末に大学史資料センターでは『大隈重信関係文書』の翻刻・刊行が終了するため、センターの人員を組み込みながら執筆・編集体制を構築する。

・二〇一三年度中に執筆・編集体制のプランニングを行い、今年開催される予定の編纂委員会（第二回）に編集委員会設置要綱案を提出して検討し、それに則して本部と協議していくことにする。二〇一四年の七月頃には執筆・編集体制を確立しておき実質的に動き出せるようにしたうえで、二〇一五年度の執筆開始に備えることにする。

これを受けて委員からさまざまな質問と意見がでて、さらに大日方委員より、執筆人員の任期や交替の仕方などを詰めたうえで編集委員会設置要綱案に盛り込みたい旨の説明があった。

4. 東伏見キャンパスへの移転に伴い対応を要する件

大日方委員から、以下のような説明があり、承認された。

(1) 東伏見キャンパスへの移転に伴う運営・作業体制について

- ・委員会等の会議は、早稲田キャンパスでの開催を基本とする。
- ・編纂作業（資料整理等）は大学史資料センター内の百五十年史編纂用スペースで実施する。
- ・収集資料の利用も、同様に百五十年史編纂用スペースで実施する。

・資料の調査・収集は、早稲田キャンパス等への出張により実施する。

(2) 理事会関係資料の返却に伴う件

・理事会関係資料を目録化作業の途中で本部に返却したが、これらは百五十年史編纂にとって根幹資料であるため、目録化作業の継続が是非とも必要である。

・法人課と協議して目録化作業の継続がスムーズに行くような仕組みづくりを行うとともに、資料のデジタル化などを行うことで百五十年史編纂の効率化を図る必要がある。

次に、報告事項は、①百五十年史編纂委員に関する件、②百五十年史編纂専門委員会の報告に関する件、③本部所管資料調査に関する件（第一次本部所管資料調査、すなわち総務部・キャンパス企画部・教務部教務課・広報室広報課の実施状況）、④データベースに関する件（早稲田人名データベース、写真データベース戦後編、理事会関係資料の目録の作業状況）、⑤東伏見キャンパスへの移転に関する件、の五件であった。

三 東伏見キャンパスへの移転と二〇一三年度後期の活動

(一) 二〇一三年度の百五十年史編纂専門委員会（第二回）

大学史資料センターは八月七日に鶴巻町の事務所を完全撤収し、同月九日までに東伏見STEP22の5階に移転した。九月二十四日（一四時三〇分～一五時三〇分）に百五十年史編纂専門委員会（第二回）が東伏見で開催された。出席者は、浅古弘 真辺将之 大日方純夫（百五十年史編纂専門委員会委員長）であった。協議事項は次の通りである。

1. 早稲田大学百五十年史編纂体制の件

(編集体制について)

委員長より、A案(編集委員会の新設)―「百五十年史編集委員会設置要綱」(案)と、B案(専門委員会の明確化)―「百五十年史編纂専門委員会運営要領」(案)の二案について説明があり、今後、B案をもとにする旨が承認された。現時点では、編纂委員会設置要綱の枠内で、新たな名称の委員会(編集委員会)を作るのではなく、専門委員会の機能の明確化を図ることが妥当であるということになった。

(執筆体制について)

委員長より、A案(専属スタッフが執筆を担当)・B案(教員が執筆を担当)・C案(教員と専属スタッフが執筆を担当)が説明され、今後、C案をもとにする旨が承認された。また、委員長より、以下のような補足説明があった。百年史段階では、当初は専属の執筆者が中心に執筆し、次いで学内各箇所の教員も執筆するようになり、やがて若手スタッフも執筆に参加するようになった。百年史の経験からすれば、B案の場合には執筆の遅延が予想されるため、執筆者の授業負担の軽減措置を学院に求めていく必要がある。A案・B案それぞれ長短があるため、折衷案としてC案が適切と考えられる。

(実務体制について)

委員長より、『大隈重信関係文書』の刊行終了を見据え、それに従事していた人員も含めて執筆体制をつくる必要がある旨の説明があり、承認された。百五十年史全巻完結まで二〇年もあるため、専属スタッフの資格・雇用形態の説明があった。委員からは、巻ごとに専属スタッフを雇用するなどの意見が出された。

2. 資料調査・収集の件

担当者より、大学本部に対して保存文書目録の資料センターへの提供を依頼中であるとの報告があり、第二次資料調査に向けて準備を行うことが説明され、承認された。各委員から、教務部から分離した国際部、研究推進部等の資料の調査が必要であるが、そこが教務部の資料を引き継いでいるとは限らない、といった意見が出された。委員長からは、教務部にどの程度の残存資料があるのか、問い合わせをしたうえ調査する必要がある、語研のようになくなった組織の資料の調査も必要である旨の説明が付け加えられた。

3. 理事会・評議員会・維持員会資料目録化の件

担当者より、①法人課に返却した理事会関係資料の目録化の継続、②未借用資料の目録化、③理事会関係資料のデジタル化などが必要である旨の説明があり、承認された。

4. 学内資料の公開の件

委員長より、百五十年史編纂に伴って、①収集資料の公開・活用について、②法人情報の扱いについて、③個人情報保護について、④複写・複製資料の扱いについて説明があり、その方針とルール作成が承認された。

(二) 二〇一三年度の百五十年史編纂専門委員会（第三回）

一月一九日（二時一〇分～一三時三〇分）、二号館津田左右吉記念室において、二〇一三年度の百五十年史編纂専門委員会（第三回）が開催された。浅古弘、沖清豪、真辺将之、大日方純夫（百五十年史編纂専門委員会委員長）の四名であった。協議事項は次の通りである。

1. 『早稲田大学百五十年史』編集・執筆体制の件

委員長より、「早稲田大学百五十年史編纂専門委員会運営要領」（案）や二〇一四年度・二〇一五年度の活動目標について説明があり、承認された。

2. 資料調査・収集の件

（1）学術院関係等の資料について

委員長より、今後、教務部所管資料（教務課以外）や学術院関係資料を調査していくが、学術院には保存文書目録はないとみられるため調査方法に工夫が必要である旨の説明があり、承認された。また、委員からどういう資料を調査したいのか具体的に示して調査依頼を出す必要があるといった意見が出され、それに対して委員長から改革・改編や大きな事件に関係する資料の調査を優先させる旨の回答があった。

（2）研究推進部、研究院・研究機構の資料について

委員長より、研究推進部や研究院・研究機構等の資料の調査・収集を行う必要がある旨の説明があり、承認された。

また、委員長より、二〇一四年三月末に廃止される研究機構もあるが、今後、廃止されていく組織の資料をどのように収集するのか、さらに研究室に引き継がれた資料や個人保管の資料も膨大にあるはずといった補足説明があった。各委員から、①研究機構が廃止される際に保管資料が処分される恐れがあるのみならず、研究機構の中にある個々のプロジェクト研究所の資料はそもそも研究機構の管轄外である、②研究機構の運営委員会の資料・議事録、活動報告書などを収集・保管していく必要がある等の意見が出された。

3. 理事会・評議員会・維持委員会資料目録化の件

委員長より、法人会議資料の目録化を継続するとともに、それらをマイクロ化・デジタル化するための準備について説明があり、承認された。

4. 学内資料の公開の件

委員長より、学内資料の受入・公開・保管の基準等について詰めておく必要がある旨の説明があり、承認された。

5. 学徒出陣及び戦争犠牲者に関する調査の件

委員長より、学徒出陣及び戦争犠牲者の調査について、また、資料センターでのこれまでの調査の経緯や今後の課題について説明があり、承認された。各委員から以下のような意見が出された。データベースとして公開して検索できるようにする必要がある。慶應義塾大学では学徒出陣関係の資料調査・聞き取り調査を本格化しており、本学でも力を入れる必要がある。

なお、報告事項は、資料調査・収集状況の件（広報課資料の移管、総務課資料の搬出・調査）、理事会・評議員会・維持委員会資料目録化状況の二件であった。

おわりに

以上、最近の一年間の進捗状況について振り返ってきた。資料センターの東伏見キャンパスへの移転問題がからみ、慌ただしい一年であった。東伏見にも、ようやく慣れてきたところである。第一巻の執筆開始が二〇一五年度に迫っているため、準備にあてられるのは二〇一四年度のみとなった。執筆に向けた準備作業は、いよいよ迫り込みである。